

あるむぜお99

府中市郷土の森博物館だより

al museo NO. 99

2012年3月20日



撮影：影山昇

目次

- 1-2 渡り鳥ってナンダ？
④渡り鳥に未来はあるのか？
- 3 展示会案内
企画展
府中メモリアル～記念品から見た地域の歴史～
- 4-5 ノート 伊能忠敬 in 府中
- 6 知る人ぞ知る！ 府中ゆかりの人物
④伊東貴斎
- 7 最近の発掘調査
「浅野長政隠棲の跡」の濠を発掘
- 8 収蔵資料あれこれ
バードカービング

渡り鳥をテーマに、身近な自然を見つめ直すことを目的とした展示会・あしもとネイチャーワールド「冬鳥来訪」も盛況のうちに幕を閉じました。表紙では、府中で観察できる冬鳥の代表種を市内在住の影山昇氏（府中野鳥クラブ）の写真で紹介してきましたが、いよいよ最後の1枚となります。

冬鳥図鑑④ ユリカモメ

東京都の鳥・ユリカモメも、冬鳥の代表種です。全国の海岸や湖に、集団で渡って来ます。夏羽では頭が黒く、日本にやって来るときは冬羽で、頭は白くなります。多摩川の河口から遡って来るものもいて、府中でも観察ができます。古典文学に登場する都鳥は、この鳥だと言われています。写真はオナガガモやオオバンとともに干潟で休む冬羽のユリカモメです。



渡り鳥ってナンダ？



④ 渡り鳥に未来はあるのか？

“渡り鳥は、繁殖地と越冬地を行き来し、時には中継地を利用して旅を続けます。彼らの常宿がつかぬ限り、旅は永遠ですが、もしも無くなってしまったら……日本でも世界各地でも、多くの渡り鳥が減る傾向にあるといわれます。反面、種類によっては増えているものもいるようです。これは、渡り鳥の旅先環境を保全する人との関わりが大きく影響し、今後の課題としても重要な部分なのです。

繁殖地・越冬地・中継地と、どこか一つでも環境の劣化が生じれば、たちまち渡り鳥の旅行プランは白紙に戻ってしまいます。実際、どの地域に原因があるのかを特定することは難しいのですが、湿地の水辺環境や、里山の管理形態の変化が悪化に繋がっていると考えられます。特に長距離を渡る旅鳥や、森林性の夏鳥に減少傾向が出ているようです。昨年の東日本大震災では、仙台市内七北田川の河口にある蒲生干潟が壊滅しました。湿地帯が砂で覆われてしまい、干潟としての機能を失ってしまったのです。シギやチドリといった旅鳥にとって、最も利用価値の高い環境が、この場合は天災によって打撃を受けたわけですが、日本の干潟は戦後から現代までで約4割が消滅しています。また、都市化や米食需要の減少により水田も半減し、管理形態の変化により秋から冬にかけての乾田化も進みました。泥の中の微生物、貝類、甲殻類などが貴重な餌となるこれらの環境が減ることで、渡りに必要なエネルギー補給の場が失われてしまうわけです。

夏鳥の減少は、越冬地の環境変化に起因すると考えられています。例えば、1980年代に著しく面積が減った東南アジアの熱帯雨林や、長年燃え続けたボルネオ島の森林火災などは、渡り鳥にとって相当大きな痛手になっていると思われます。サンコウチョウやヨタカなど、日本の森林で繁殖し、



オオハクチョウ 撮影：影山昇

東南アジアの熱帯雨林で越冬する夏鳥は、この影響からか80年代に減り始めています。まさに森林伐採は人の手による環境破壊の一例で、人が渡り鳥の宿を奪ったと言えるでしょう。

一方、ガンやハクチョウ類は増加傾向にあります。かつては過激な狩猟や湿地の開発で激減したガンでしたが、1971年の天然記念物指定に伴って保護が強化され、数を増やしてきました。ハクチョウは、給餌により増えたという見方がありますが、実際は給餌をしない地域でも増えています。彼らの繁殖地であるシベリアが温暖化し、雪解けが早まることで湿地面積が増え、営巣場所が確保しやすくなったという考えもあります。いずれにしても環境変化には人的作用が関わっていることに違いありません。

国境を越えて来る渡り鳥を守るためには、ルート上に位置する国々の協力が必要になります。生息地の保全はもちろん、捕獲や輸出入の規制、共同研究推進のため、日本は各国との渡り鳥条約を結んでいます。生息地を守る世界規模の条約としては、ラムサール条約が有名で、多くの渡り鳥が生息する湿地の保護と利用促進を目指す内容です。渡り鳥を考え、守り、人との関わりを重視することで、地球規模の環境維持に繋がるという図式を念頭に、彼らの未来が保証される環境づくりを意識していきたいものです。

(中村武史)

企画展

府中メモリアル

～記念品から見た地域の歴史～

2012年4月28日(土)～6月24日(日)

会場：博物館本館1階 特別展示室
観覧無料

日本人は昔から文字記録を次々と作り続けてきました。それは出来事を記録するという事以外に、モニュメントとしてそれ自体が地域の象徴となるものもありました。当然ながらこうしたものは、地域に一点だけつくられるのが通常だったようです。

しかし、明治以降には、記念碑のような一点もの以外に、さまざまな「記念（紀念）品」をつくる事が多く行われるようになりました。

凱旋^{がいせん}、落成^{らくせい}、祈願^{きがん}の証^{あかし}、周年行事^{しゅうねん}、祭礼^{さいれい}などのイベントの際に、人々は記憶しておきたい「記念すべき」事柄について、記念品を作製、配布してきました。バッジ、メダル、ネクタイピン、文鎮^{ぶんぢん}などの小物類^{せぶつぐみ}や盃^{さつ}、切符、タバコ、お酒といったバラエティ豊かな記念品の数々は、市内で起こったさまざまな出来事を記録しているといってもいいでしょう。

1954年（昭和29年）の市制施行以来、府中市でも周年行事のたびに多くの記念品がつくられています。また、大國魂神社や市内を走る鉄道



軍の除隊や戦勝を記念してつくられた盃類

にまつわる記念品もいろいろあります。府中市郷土の森博物館でも、開館に際して記念品がつくられました。

開館25周年にあたる本年、「記念」をキーワードに、主に府中市域に関連する、さまざまな記念品類を中心に紹介します。そしてそれらを通して府中のあゆみをさぐってほしいと思います。

私たちは何を記念し、そして何を残そうとするのか、モノを通した記憶の記録化の足跡を追ってみましょう。
(佐藤智敬)



京王競馬場線開通30周年記念乗車券（1985年）



赤羽末吉氏画、府中市制20周年記念皿（1974年）

7日は雨。後発の忠敬の組は本町から六所宮。六所宮については祭神や神殿建立についての情報も詳しく記載されています。その後常久、染屋、車返から布田まで。先発組は布田から始め、双方高井戸宿泊り。8日に甲州街道最後の測量を行いながら内藤新宿に着いて、妻をはじめ懐かしい人々の出迎えを受けました。

▼府中の記録

日本各地には忠敬の測量隊の様子を記したものが数多く残っているようですが、府中では六所宮（大國魂神社）の記録の中にありました⁽¹⁾。

時の神主猿渡盛章が「一 右五月四日国々測量御用として、伊能勘解由・坂部貞之丞・下河部政五郎・青木勝次郎・永井要助、右五之衆出役被致候二付、御改請書之案紙神領村方へ来ル、文面左之通」と、5月4日に神領の村方へ回ってきた先触れを書き写していました。御改請書之案紙とは現地について差出す事前調査書の雛形です。先触れの本文は次のようでした。

覚

国々測量為御用、從甲州府中武州内藤新宿迄江戸街道相測候間、御証文通人馬無遅滞継立、且通行筋村々より、別紙案文之通、書付差出村送り案内可有之候

一 惣人数十七人相越候条、止宿等差支無之様、夜方星測有之候間、明地十坪斗用意可有之候

一 雨天其外御用調・測器手入等二而逗留も有之間、泊り付者近々途中より可相達候、勿論賄方之儀者御定之木錢米代相払候間、所有合之品二而一汁一菜之外可為無用候

とあり、この後に測量の手伝いや荷物持ちのための人足を62人と馬7疋用意するように書かれています。

調査書の方は村高、家数、街道、川、寺社、名所旧跡などを半紙の縦帳に仕立て、難読名には仮名をつけて出すように指示しています。

夜間に星の観測を行うための空き地を用意しておけというのは、いかにも測量御用ならではです。府中ではどこを用意の場所としたのでしょうか。残念ながら日記によれば大曇り、夜間観測はできませんでした。

もし、測量できないくらいの雨や調べ事で逗留する事になっても、規定の木賃銭は払うから

と断っています。各地の例をみると結構歓待もされていたようですが、食事は一汁一菜でよいとの建て前ではありましたが。

▼神主日記から

この先触れを受けて、実際にはどんな対応がなされたのでしょうか。同じ時の盛章の日記を見てみましょう⁽²⁾。

5月4日夕方、社領の八幡宿村の村役人が測量役人が来るという書付を持って来ますが、調査書については、大体以前「分間」の時に差出した書付の通り書くつもり、とあります。文化2年9月に勘定方と御普請役が巡回して「甲州海道分間絵図」を作った時にも同様の調査書を出したので、あれでいいだろうの気持です。

5日朝には社中、つまり上級神官や社僧を集めて相談し書付を仕上げます。昼時より雨でしたが、夜分の御神事中は降らずに済みました。そう、この日は例大祭くらやみ祭当日なのでした。

6日昼過ぎに測量役人、つまり忠敬は本町扇屋（本陣）に着きます。村役人は本陣まで挨拶に出向きますが、盛章は行きませんでした。直々出向く程でもないという判断でしょう。社地のと村方のと書付を村役人から出しましたが、両方とも問題なく受理されました。明朝内々に六所宮を参詣するそうです。

7日早朝役人（忠敬）が御宮参詣しました。盛章も社頭へ出ようと思っっているうちに、済んでしまったと知らされました。

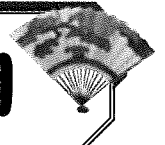
1年9ヶ月におよぶ長旅も明日には終わるという日の忠敬の祈りは何だったでしょう。

伊能忠敬研究によれば、一体に大名領に比べて幕領は対応があっさりしていたようですが、府中でもあまり大騒ぎという様子ではありません。盛章も忠敬が後世こんなに有名になる人物とは思ってもよらなかったのでしょうか。二人は出会うことなく過ぎてしまったのです。もし出逢っていたら、中年になってから、生涯の仕事を成し遂げた人として、猿渡家の親類に川崎平右衛門定孝がいます、なんて話も出来たかも知れませぬのにね。

(1) 『大國魂神社文書Ⅳ』へ-139

(2) 『六所宮神主日記』

知る人ぞ知る！ 府中ゆかりの人物



④伊東貫齋

幕末に活躍した蘭方医のなかに、初代駐日総領事のタウンゼント・ハリスを治療した伊東貫齋という人物がいます。彼はお玉ヶ池（千代田区）の種痘所を開き、疱瘡（天然痘）の予防に尽力した伊東玄朴の婿養子となり、伊東姓を名乗りましたが、幼名を織田貞次郎といいます。実父は六所宮（大國魂神社）で禰宜をつとめていた織田筑後で、その次男として文政9年（1826）5月に生まれました。長じて伊東玄朴の蘭学塾象先堂に入門し、さらに大坂の緒方洪庵の適塾で学んだ後、嘉永6年（1853）に玄朴の長女と結婚し、伊東貫齋と改名しました。

その後、安政2年（1855）に紀州藩寄合医師となり、同4年に幕府から伊豆下田（静岡県下田市）での勤務を命じられました。下田は安政元年締結の日米和親条約で開港された場所で、アメリカ総領事館がおかれ、タウンゼント・ハリスが総領事として着任していました。

ハリスは、安政4年10月21日に大統領の親書を手に江戸城で将軍家定に謁見しましたが、この際貫齋は「翻訳御用」を勤めています。ハリスの秘書兼通訳のヘンリー・ヒュースケンが英語をオランダ語に直し、それを貫齋が日本語に訳したといいます。このような過程を経て、翌年に日米修好通商条約が結ばれるわけですから、貫齋は幕末から明治にいたる歴史の胎動の一翼を担ったといえるかもしれません。

貫齋が重要な役割を果たしたのはこれだけではありません。日米修好通商条約が締結される半年前、ハリスは病床の人となり重篤な状況にありました。冒頭にも記しましたが、この治療をしたのが貫齋で、ハリスの病気は間もなく平癒しました。少し大げさな言い方ですが、この時ハリスが死亡していれば、日本の開国はもう少し遅くなったかもしれません。

開国後欧米人が国内に入ってくると、攘夷を主張した人々が外国人を殺傷する事件がしばし

ば起こりました。文久元年（1861）5月にイギリス公使館が置かれていた高輪の東禅寺を、尊攘派の水戸浪士が襲撃した事件もその1つです。この際2人のイギリス人が負傷しましたが、幕府の命令で彼らの治療にあたったのも貫齋でした。

このような活躍により、貫齋は安政5年に将軍やその家族を診察する奥医師となり、万延元年（1860）に、幕府の西洋医学校である西

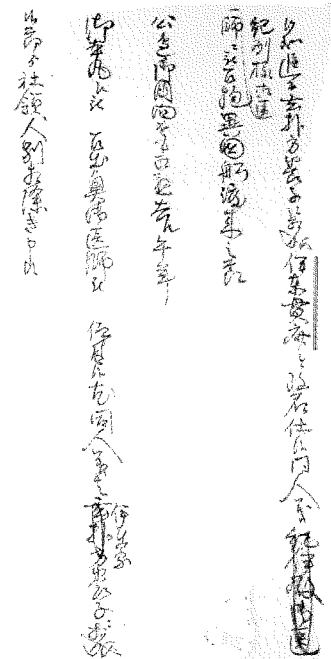
洋医学所の教授になっています。明治時代になると、天皇の侍医である大典医となり、明治26年（1893）7月に67歳でその生涯を終えました。

六所宮の禰宜・織田家では、貫齋以外の人も蘭方医として活躍しています。長男の織田雅楽も伊東玄朴に入門し、織田研齋と名乗り薬研堀（中央区）で開業しました。会津藩等のお抱医師や水戸の藩医をつとめ、明治時代には侍医となり、日本橋（中央区）に私立病院の養生舎を開きました。貫齋の父・織田筑後と家督を継いだ三男・兵部も蘭方医術を学び、安政3年頃から自宅で種痘を行いました。このように、織田家は幕末に4人の蘭方医を出していますが、なかでも今回とりあげた貫齋は、政事の中核にかかわる重要な活躍をした人物なのです。

（花木知子）

【参考文献】

沼謙吉「幕末・明治の多摩の名医たち」『多摩のあゆみ』第105号所収 2002年
田辺栄吉『「柴田収蔵日記」と多摩の蘭学者』 2006年



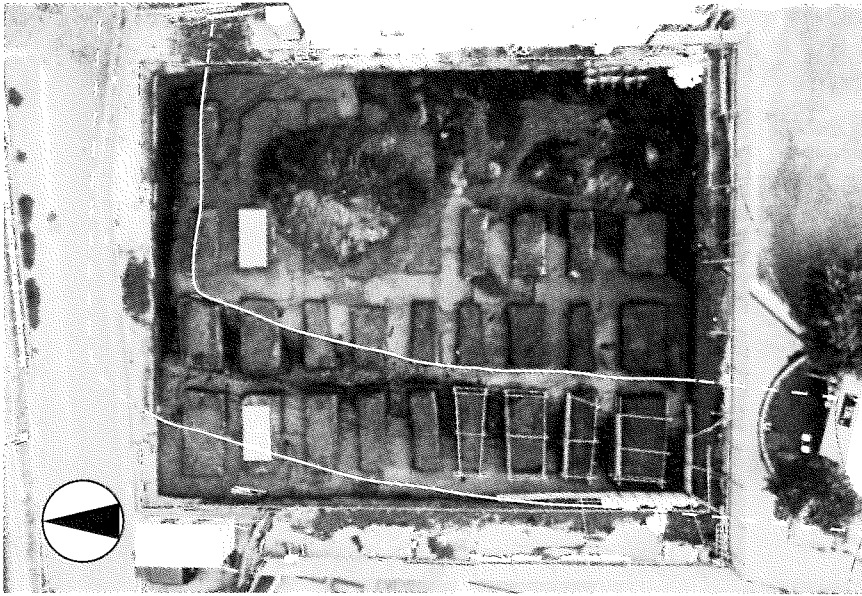
大國魂神社に残る伊東貫齋について記された史料。翻訳御用や奥医師をつとめたことが記されている。

最近の発掘調査

東京都指定旧跡

「浅野長政隠棲の跡」 の濠を発掘

白糸台5丁目 府中市ふるさと文化財課 西野 善勝



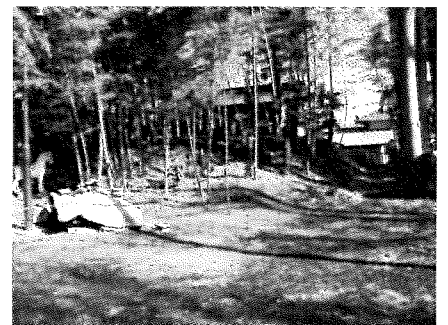
浅野長政は、豊臣家五奉行のひとりとして名を馳せた武将です。秀吉亡き後の慶長4年（1599）、長政は徳川家康から暗殺の嫌疑をかけられたため、家督を子息幸長に譲って武蔵府中に隠棲しました。その場所とされているのが、白糸台5丁目13番地にある東京都指定旧跡・浅野長政隠棲の跡です。ここには以前、土塁が巡っていたといわれ、現在も敷地の南西側に一部が残っています。

遺跡は、ハケと呼ばれる府中崖線の、すぐ上の眺望のよい高台にあります。崖沿いには樹木が鬱蒼としていて、昔の府中の景観がよく残されています。この由緒ある地で、発掘調査が行なわれました。その結果、崖線から150mほど台地に入ったところで、幅が4～7mもある濠のような大溝が発見されました。深さも地表から1.9～2.1mありました（上写真の白線部分）。

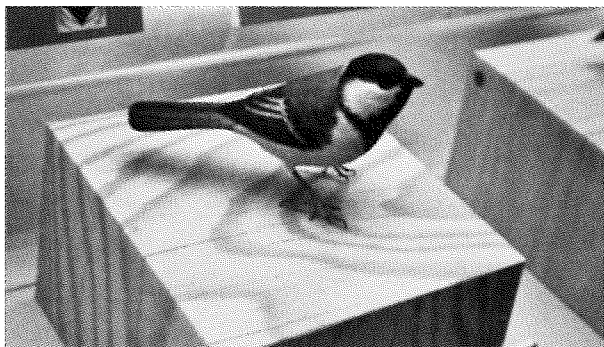
調査部分は直角に近い角度で曲がっていて、東西方向は約20m、南北方向は約30mが確認できました。南北方向をまっすぐに延ばすと崖近くに残る土塁のすぐ西側を通ります。その想定位置を調査したところ、そこにも大溝があることが確認できたので、南北方向は約120mに及ぶことが現実になりました。以前残っていたという土塁の位置から推定すると全体は方形に近い区画で、土塁のすぐ外側に大溝が配されていたものと考えられます。今回発掘した部分はその区画の北西角付近にあたります。

武蔵国府関連遺跡内では、一定の範囲を区画する中世の溝が、JR西府駅周辺やJR府中本町駅の東側でも発見されています。これらも府中崖線の縁から伸びた溝が途中で直角に曲がり、方形に近い形状をしています。このような溝で囲まれた施設は、中世居館の一つの形態とされています。溝の中からは常滑焼の甕や香炉の破片なども出土しているので、浅野長政隠棲の跡が中世の居館であった可能性もあるわけです。

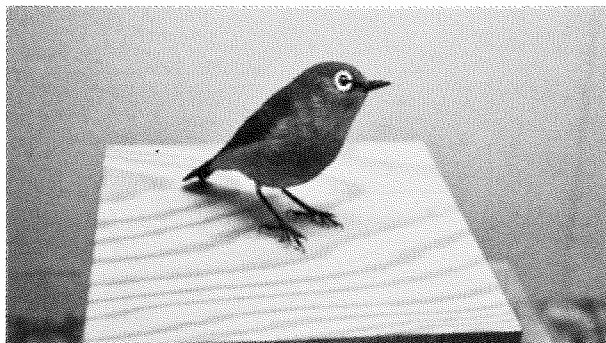
今回の溝が伝承とどのような関係にあるのか、詳しい時期や性格はさらに検討が必要です。それでも、この発見でまた新しい中世府中市の景観が現れてきたといえるでしょう。



崖線近くに残る土塁
竹林の部分が2m近く高くなっている。
土塁の手前に大溝が埋まっていることが明らかになった。



シジュウカラ



メジロ

博物館で収集している自然(生物)資料の大半は、**標本類**です。植物は**さく葉**(押し花)、昆虫は**生体乾燥**(展翅展足で形が整えられたもの)、そして**野鳥**や**哺乳類**等の動物は、**剥製**(中身を抜いて詰め物やワイヤーで固定したのもの)といった形で保管されています。植物や昆虫は野外で採集し、自前で**標本**が比較的簡単に作製できます。もちろん、植物や昆虫も採集禁止種や地区がありますが、全てが捕獲禁止とはなっていません。しかし、こと鳥の場合はなかなか難しい問題があります。それは、勝手に捕獲することが**法律**(鳥獣保護法)で禁じられているからです。偶然の事故で落下した個体を回収したり、剥製業者から購入したりする他、鳥を採集し、剥製標本を作製することは**容易**なことではないのです。

そこでバードカービング、即ち鳥を彫り出して彩色した彫刻の登場です。元々は1800年頃、アメリカでガンやカモを捕獲する際に、おとりとして鳥に似せたものを置き、獲物を寄せるために作られたのが**ルーツ**と言われます。これらは**デコイ**と呼ばれ、**ダックケージ**(カモ鳥かご)を意味する言葉のようです。その後、おとりとしての実用品からリアルに鳥の姿を彫刻した**工芸品**へと進化し、**野鳥彫刻**(バードカービング)という言葉が生まれたのです。日本では1970年代の終わりに紹介され、その後は多くの製作教室やクラブも誕生していきました。

当館では32点のバードカービングを所蔵しています。先の特別展「**冬鳥来訪**」での展示では、見事に剥製(本物)と同化していました。剥製標本とほぼ変わらない形状であるならば、展示会等で使用する場合は、このカービングが有効でしょう。何故なら剥製標本は時間と共に傷みも生じ、色もあせてしまいます。調査研究目的として、**翼長**や**体長**の計測、**羽毛**や**嘴**などの細部を見るには本物である必要がありますが、一般に公開する分にはカービングで十分理解してもらえるものと考えられ、博物館では需要が高まっています。むしろ、体の**特徴**を正確に表現しているので、一目でわかりやすい資料と断言していいでしょう。野鳥保護の観点からも剥製を展示しない方向性が叫ばれる**昨今**、自然保護意識の向上にも一役買っているようです。

当館で所蔵するバードカービングは、世界でも**トップクラス**の職人・内山春雄氏による作品で、**羽毛**1本1本がリアルに彫られた、かなり精巧なものです。剥製と比べても遜色ない出来ばえには驚かされてしまいます。それぞれの作品の**ポーズ**は今にも動き出しそうで、細かい**羽毛**の描写は体温の暖かみさえ醸し出します。

野鳥剥製は、ある程度の**劣化**には目をつぶれるのですが、剥製そのものの**入手**が手間であると同時に、保護の問題も関わってきます。バードカービングはその表現力はもちろん、今後の活用にも大きな**貢献**が望める資料であることに間違いはなさそうです。(中村武史)